





筒井康隆

# 家族八景

新潮社

かぞはつけい  
家族八景

一九七二年二月一五日印刷  
一九七二年二月二〇日発行

著者 筒井康隆  
ついでやすたか

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社  
東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話東京(03)二六〇一—二一

振替東京八〇八

東洋印刷 加藤製本所

定価五〇〇円



© 1972 Yasutaka Tsutsui

Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取替いたします。

長編小説 家族八景 目次

---

無風地帯……………七

澱の呪縛……………三

青春讃歌……………三

水蜜桃……………七

---

---

紅蓮菩薩……………三

芝生は緑……………四

日曜画家……………九

亡母渴望……………一〇

---

裝幀 真鍋 博

家族八景





無  
風  
地  
帶



前庭の、赤い花が満開だった。なんという花なのか、七瀬は知らない。彼女は花の名前には興味がなかった。

尾形家は、ヴェランダが広く明るい中流の住宅だった。七瀬はプザーのボタンを押して、しばらくポーチに佇んだ。郊外電車の警笛がかすかに響いてくるだけで、あたりは静かだった。

ドアを開いたのは、尾形咲子だった。まだ五十歳にはなっていないのに、地味な和服のせいか、ひどく老けてみえた。

「お入りなさい」

七瀬が名乗ると、咲子は安心したような笑顔を見せ、彼女を応接間に案内した。室内にある家具類はいずれも新しいものばかりだった。安く新しいものを次つぎと買い替えていく主義の家庭だった。

紹介状を読み終え、咲子は顔をあげて七瀬に笑いかけた。「秋山さん、あなたのことをたいへん褒めてらっしゃるわ」

七瀬は軽くうなずいた。紹介状を見なくても、何を書いてあるか彼女は知っていた。

新しく訪れた家庭の主婦がたいていそうするように、尾形咲子も、七瀬がなぜ前の家を辞したか根掘り葉掘り訊ねるだろう、と、七瀬は予想していた。そして特に、それが七瀬の意志によるものか先方の事情によるものかを、遠まわしに訊いて確かめようとするだろうと思つてゐた。しかし尾形咲子は、何も訊ねなかった。

また咲子は、新しいお手伝いがやってきた時たいていの主婦がそうするように、派手にはしゃいで家の中を案内してまわるといふこともしなかった。むしろ所在なげに、七瀬と向ひあつたまま、ぼんやりしてゐた。

七瀬は、そつと咲子の心にさぐりを入れてみた。そして彼女の考えを読んだ。そこにあつたものは、意識のがらくたであつた。

風呂場のタイルが落ちかけていること。夕食は牛肉とビーマンの味噌炒め。テレビの垂直同期の調整困難と物置の鍵が壊れていること。そしてまた七瀬に、炊飯器が故障しているが電気屋が明日新製品を持ってきてくれることを説明しなければならぬこと。

咲子の思考は、家庭内のことから一歩も出てはいなかった。いや、それは思考といえるかどうかとも疑問だつた。茫漠とした意識野に瑣細な事物がごろごろところがっているだけだつた。

尾形咲子はあきらかに、何事かから、些末的日常茶飯事に逃避しているのである。こういつたタイプの意識構造には、七瀬も数度、出会つてゐた。無視されることに馴れ、軽蔑されてゐることを知つていながらそれを忘れようとはかりしてゐる、精神力の弱い中流階級の初老の女性、決してこのタイプだつた。

咲子は七瀬の持ってきたスイーツケースを眺め、重そうだと思い、この重そうなトランクを持って坂道を登ってきたのだからさぞ疲れただろうと想像し、やっと茶を出すことに思いあたった。

「お台所へ行ってお茶を飲みましょうか」

そういつて咲子は立ちあがり、ふたたび七瀬に微笑みかけたが、その微笑にはもはやなんの意味も、まったく何の意味も含まれてはいなかった。七瀬がおどろいたことには、それは無意識的な親近感の表現ですらなかったのである。

他人の心を読み取ることのできる能力が自分に備わっていると自覚したのがいつだったか、七瀬は記憶していない。しかし七瀬は、十八歳になる今日まで、それが特に珍しい才能であると思ったことは一度もなかった。おそらく、多くの人間がそういう能力を持っているに違いないと思っていた。なぜなら、そういう能力を持っている者は必ず、自分同様それを隠すだろうから、と思っていた。

読心ができるため、自分は得をしているとも思わなかったし、損をしているとも思わなかった。聴覚や視覚の一種であると考えていた。他の感覚と少し違うところは、感知するために多くの努力を要することだった。七瀬はそれを「掛け金をはずす」ということばで他の精神作業と区別していた。

「掛け金をはずし」た以上は、必ず「掛け金をおろさ」なければならぬことを、七瀬はきび

しく自分に律していた。掛け金をはずしたままにしておく、相手の思考がどんどん流れこんできて、ついには相手の喋ったことと考えたことの見わけがつかなくなり、自分の能力を相手に知られるという非常に危険な事態になり兼ねないことを、七瀬は経験から悟っていた。

その日、咲子からいろいろ教わっている間にも、七瀬はときどき掛け金をはずし、彼女の心を覗いてみた。しかしそこにあるのは、やはり荒廃した原野に散らばる、風化した日用雑貨だった。咲子自身が、彼女の家族のことをどう思っているか、家族のそれぞれに、どのような感情を抱いているか、それさえつかめなかった。

尾形家の主人、尾形久国は、造船会社の総務部長だった。子供は二人いる。長女の叡子は女子大の四年、長男の潤一は今年大学へ入ったばかりである。叡子は美しい娘であり潤一は柔弱である。そしてどちらも享楽主義的な性格である。これは久国の血を継いでいるからである。——七瀬が咲子から知り得たことは、その程度だった。むろん、その大半は咲子がことばとして喋ったことであつた。

日が暮れたが、久国も、子供たちも、なかなか帰ってこなかった。いつものことらしくて、咲子は平然としていた。

簡単な夕食を終えてからの咲子は、もう七瀬に話しかけようともせず、ただぼんやりと茶の間のテレビを眺めているだけだった。それは観ているのではなく、文字通り眺めているだけだった。

十一時を数分過ぎた頃、久国が帰宅した。

七瀬は疲れていたが、主人に挨拶しなければならぬと思い、眠いのを我慢して起きていた

のである。

「子供たちはまだか」

茶の間へ入ってきた久国に、七瀬が挨拶しようとした時、彼女の存在を無視して、彼は妻にそう訊ねた。

「はい。まだです」と、咲子は答え、例の意味のない笑いを浮かべながら七瀬を紹介した。

「よろしく願います」七瀬は頭を下げながら、掛け金はずししてみた。

久国は、ちらりと七瀬を一瞥して、ああとよそよそしげにうなずきながら、七瀬を、彼が今そこから帰ってきたばかりの高級クラブの若い女たちと比較していた。総務部長という職掌柄、観察眼は確かであった。

「何か、おめしあがりになりますか」

咲子が訊ねると、久国は柱時計を見てうなずいた。

「茶を貰おう」

茶が飲みたいのではなく、娘のことが心配なのだが、彼自身それに気がついていなかった。彼はことさらに、あんな不良娘など、もうどうにでもなれと思っていた。娘のことを心配するのは、もうとつくにやめたつもりでいるのだが、それは彼の意識の表面だけのことであった。彼は帰宅の遅れた娘の弁解を聞いて安心したいのだ。その弁解が嘘であると知りながらも、やはり聞いて安心したのである。

これは親ごころではない、と、七瀬は思った。それは、嫉妬だった。



久国は妻に、何の感情も持っていないかった。家畜を見るのと同様、もはや軽蔑の心さえなかった。美しかった娘時代の妻の思い出を掘り起しながら彼女に接することをやめてしまつてから、もう十年近くになっていた。一種の不憫さから話しかけることも、やめていた。結果はいつも、深い軽蔑に終つたし、妻もそれを知つていて、軽蔑されるよりは無視される方がいいというような態度を、しばしば示したからである。現在の久国の心の中には、会社内の人事面の関係や問題が複雑に入りまじり、残る空間の大半が若い女のことで占められていた。

しかし、女への感情も、むしろそれをかき立てようとするため極度に誇張されていて、七瀬には空虚さしか見られなかった。

「君、十八歳だつて」と、彼は訊ねた。訊ねてから、それがまるでクラブの女にいうような口調であると気がついて、あわてて自ら、うん、うんとうなずき、結論をいった。「若いってのはいいな」また、うなずいた。「若いってのは、いい。うん」

久国の行くクラブには、七瀬とさほど歳の違わない娘がいて、久国はその娘と寝ていた。七瀬が比較されているのは、その節子という名の娘とであった。肉感的な娘だった。

「ほんとに、そうですわね」眼を深夜ショーに釘づけしたまま、咲子が相づちをうった。

叡子が、酔つて帰つてきた。男友達に酔わされた末、ホテルで休憩し、車で送ってもらつたのである。

彼女は七瀬を見て、この子が来たため、今夜は遅い帰宅の言いわけをしなくてもいいだろうと考へたが、すぐに思い返し、とりあえずあっさりとは弁解しておくことにした。